

# 自分史・これまでのこと

齋藤 正俊

## 1. はじめに

大阪教育大学附属高等学校平野校舎を退職するときに、やっと終わる、という気持ちが強く、その後の事はあまり考えることができなかった。

在職中に、親和女子大学のジュニアスポーツ教育学科に応募をしていたものの精神的に辛い思いをしていたために、意欲的に飛び込む自信はなかったのであるが、「教員を育てる」という目標は非常に魅力的であった。

それから10年が終わろうとしているが、大学には感謝の言葉しかない。先生方や職員の方々に悪い思いは一つもなく終われるということが大きな財産である。学生も性格のかわいらしい者が多く、穏やかな10年間であった。

## 2. 大阪府教員採用試験

東京教育大学・体育学部を卒業してから、大阪に来た。教員という選択肢は大学のカラーであろう。3年次から仲間での話の中に将来どうするか、や田舎にもどって教員をするつもりである、とか先輩方の話で教員ということがかなりささやかれていたからである。

教員になるということが周りの話からなんとなく教員と決まってきたような気がする。大阪の柔道部OBから誰か大阪を受ける者はいないかとゼミ担当の先生に連絡もあったようで、先生方からもよく話があったように記憶している。

東京か大阪か迷ったすえに当時大阪が1番採用試験が早かったので受験した。剣道専門の友人が大阪出身・堺市だったので、そこに泊めてもらい受験した覚えがある。試験前日に大阪に入り、友人の家に行って挨拶をしてから、二人で近所を散歩したのであるが、「おまえ、同和という言葉を知っているか」と言われて「それ何?」と答えたら、「大阪を受験するのに、そんなことも知らんのか!」と言われたことを覚えている。しばらく、レクチャーを受けたが結局は出題されなかった。

1次試験を突破し、2次もあったはずが記憶にない。あるのは9月に校長会で東京に来られた最初の赴任校の校長に会ったことだけである。今はこんなことはない。よく考えれば、必ず私のところにきて欲しいという主旨である。幸せな時代である。これで合格が保証されたのであるから。

1月に、健康診断があるので、日帰りで東京から大阪に来たことを覚えている。谷町6丁目にある府立の健康センター(?)だったと思うが、ちょうど大学では寒稽古の最中であり、早朝の稽古を休めるとちょっぴりうれしかった覚えがある。

## 3. 大阪府立堺東高等学校

堺市の南に泉北高速という鉄道が走っているが、その泉ヶ丘から歩けば20～25分、バスで10分ぐらいの場所に堺東高等学校があった。最初に赴任した学校である。生徒は堺の南にあるのに「堺東か」と言っていたように思う。通称「ガシ高」である。現在もガシ高である。

保健体育科の主任は33歳（若かった）であった。女性の先生が2人おられ、私を入れて7人だった。ここで保健体育教員の心構えから、姿勢から、教員としての全てを学んだと思う。

新人の務めとして、1番早く学校に入り、6人の先生方にお茶やコーヒーを入れていた。特に苦にも思わなかったし、こんなものなのだろうと思っていた。

新設3年目の高校であったので、3期生と一緒に赴任したことになる。非常に楽しい時を過ごさせてもらったと思う。1つ上の男性の先生が大学の剣道部の先輩であり、2つ上の男性の先生も大学のラグビー部の先輩であったため、いつも一緒にいた。

苦手な種目は、いつも3人で放課後、部活動が終わってから練習した覚えがある。私が1番下手くそでいつも教えてもらっていた。

ここでは、様々な事を学ぶことができたように思う。保健体育の教員として、担任としてである。保健体育の教員としては、スポーツテスト際の準備で主任にきつく注意を受けたのは忘れられない。種目の1つにハンドボール投げがあったが、ボールの数は数えたものの、空気がボールに入っているか確認を忘れたのである。後で主任が点検して、「これで準備したと言えるのか！」と言われたことがあり、シュンとしたのは忘れられない。それからは、気を付けるようにしていた。

担任になったときは、学年主任の先生に教わったことも大切な財産である。新人と言うことで心配だったと思われるが、学年の行事の場合、必ず近くにいて見守ってくれていた。学年行事に向けてだったと思うが、下見もご一緒させていただき、どのようなところを確認するのかを教えてもらったと思う。見せて経験させて覚えさせる、という方法である。また、家で食事もごちそうになったことがある。

まだ、旧態依然の文化があった時である。今は、教員を目指す者が減ってきている時代である。もう、このようなことは通用しない。とにかく、夢中で過ごした時である。

堺東には9期生まで覚えているので、7年勤務後豊中高等学校に転勤した。すでに結婚しており、転勤の前に西宮に転居していたので、転勤希望を出していたが1年か半年か西宮から大阪の堺、それも泉北まで2時間通勤にかかったが通っていた。

帰りは午後10時前後の電車に乗らないとその日のうちに家に帰れないということがあり、人間関係が疎遠にならないように気を付けていたように思う。

ちょうど転勤の話は3月の春休みであり、同僚とスキー場にいた時に校長より電話があって「豊中の話があるが行くか」と言われ、通勤1時間と言うことを聞いて「いきます」と答えたと記憶している。

とにかく、全て学んだように思う。「保健体育教員の心構え」「学校行事の企画・運営」「同和」「生徒指導」「担任業務」「部活動指導」についてである。

特に、保健体育主任に、「体育の教員は他の教科の先生方の面倒も見る必要がある」と言われたことが大きいように感じている。面倒を見るとはどういうことか。多分であるが最近言われている教員間のコミュニケーションを大事にせよ、大変そうな仕事は協力する、ということであろうと理解している。柔道の創始者の言葉に「人のために自分の力を尽くせ」という内容があるのと共通している。貴重な時間をいただいたと考えている。

#### 4. 豊中高等学校

豊中市にある伝統校である。前身は女子校であるが、戦後共学校になっている。阪急豊中駅より徒歩10分ほどのところにある。テレビに出てくる高校生の青春物語のような学校であった。堺東の同僚だった教員が一度、出張の後に会いに来てくれたが、「部活動も盛んで、勉強もする、学校らしい学校だね」と言ったのを覚えている。豊中高等学校近辺では進学校で通っているが、自由な校風であり、生徒の自主性を大切にしている学校である。生徒はのびのびとクラブ活動に打ち込み、進学を目指して2年の後半からは進学モードに切り替える事のできる生徒集団である。保護者もOBが多い。

豊中時代に、保健体育科教員の学校のでの位置関係が見えてきたように思う。生徒は2年次、3年次に保健体育の教員が担任になると、少し不安なようであった。保護者も同様であり、両者とも、進路指導ができるのか、と思うのであろう。

教員は授業が勝負である。特に座学と言われる教室の授業への視線は厳しく、保健体育でいえば、保健の授業で教科書だけでは満足しない。教科書は読めばわかる、受験教科ではないのでリラックスしながら授業に臨むため、質問も出て授業は面白い。従って、教材研究の時間はかなりの時間を要することになるが、教員としては楽しい時間になる。

この学校では、保健体育を特に体育を休む生徒は少ない。というかほとんど休まない。彼らにとって運動のできる貴重な時間だからである。つまり保健体育は受験に絡まず、ゆったりとした時間なのである。

生徒は保健体育の教員はあまり教材研究をしようと思っていない。それに甘んじてよいのかである。また、保健体育は副教科と言われており受験には関係ない。ここに、生徒、保護者そして他教科の教員も受験に必要な教科として一段下に見ている風潮がある。いわゆる差別化である。これに甘んじてよいのであろうか。ただ、漠然と考え始めていたが、対策的なことは文字に親しむ事をずっとしてきた。知識の獲得である。専門教養も必要であるが、社会全般の教養が必要と思い、手当たり次第に文字を読み始めた。通勤も40分は電車に乗るので、その時間帯は本が読めるからである。

柔道部の顧問(専門種目は柔道)をしたが、生徒を見て感心したのは、堺東時代は、よく部員が辞めたりしたのであるが、豊中高では辞める生徒がいなかったと思う。印象に残っていない者は、辞めたとしても、入部して印象も薄いときに辞めているのであろう。

しんどそうにしている部員にそれとなく聞いたとき返ってきた答えは「自分で決めたので引退までやめない」という答えであった。実際、実業団に連れて行ったことがあるが「死ぬかと思った」というような経験であったはずである。学校に帰ってきたら、「あの練習に比べたら、学校の練習は楽勝！楽勝！」と行って休まない。感心した。卒業してからは、柔道部に入ったのは京大に行った者が性格的に合っていたのか続けた者がいるが、あとはゴルフ部、アメフト部位でその他の体育系にはほとんど入っていない。

ここでも担任をしたが、学年の教員や生徒、OB会と人間関係が上手くいき、楽しい時代であった。今も交流があるのは教員として大きな財産である。特に数学の年配の教員とは仲良くなって、家族ぐるみの付き合いをさせていただいた。残念ながら亡くなられ、私は縁が切れたが、妻は今も奥様と年に数回会っている。どちらかが亡くなるまで続くであろう。このとき、生徒指導部長をしており、大阪府の生活指導研究会に所属しており、活動していた。

## 5. 西成高等学校

ここの学校は、大変な学校であり、当時、久米宏の「報道ステーション」?で「日本にも指導困難校という言葉があるんですね」と言っていたのを思い出す。近況の番組では「失われた30年、反貧困教育」という番組があった。失われた言葉にはなじめなかったが、まさにその通りであった。

ここへの転勤は、当時の西成の学校長が豊中の校長に直談判に来られたのがきっかけである。生活指導の関係である。当時の豊中の校長も「ここまで言ってくれるので、行きなさい」と転勤を承諾している。私は「考えさせてくれ」と言ったものの、府教委が絡めば逃げることはできないだろうと思っていた。お二人の校長とも力があって、逃げるのは不可能と判断したこともある。本心は頑強に断って欲しかったのであるが、何十年と転勤なしの教員もおられたので、私はここでは必要ない教員か、と残念な思いもあった。

転勤したら、即担任であった。また、新転任者の地域見学会があり、何人かの先生方と地域を回った覚えがある。地域と密着した学校ということである（普通こんなことはない）。

学校を歩いた時に気になったのが、廊下の黒い斑点である。聞いたら生徒がたばこを吸って、捨てたあとだと聞いて驚いた。ほとんど一面に黒い斑点がある。教員は何をしていたのか、と言った時、返ってきたのは馬鹿にしたような顔である。教員には空き時間があり、今までは、その時間は教材研究に充てていたのであるが、西成では、そのときに校内巡視が割り当てられる。見回りである。一部の生徒は授業が面白くないと教室から出て、陰に入りたばこを吸う、ひどいのは街に出て行く等である。生徒を引き留めるのは体の危険を伴う。生徒が暴れたり、暴力を振るうからである。大分落ち着いてきてはいたが、まだまだ大変であった。前におられた教員はよく対応しておられたと頭が下がる思いであった。

1年に入学し、3学期の終了する頃にはクラスで4～5人は辞めている。自主退学である。勉強が面白くないである。当然である。勉強のできる環境で育っていないのである。普通は親が育て、勉強のできる環境を作っていくのが一般的である。

しかし、それは、きれいな事である。そういう環境で育っている生徒もいるが、辞める生徒はそうでもない。母子、父子家庭はざらにある。その生徒がクラスの中にいる。

一度、母子家庭で辞めるといった生徒の母親と話したときに、もう仕事を始めていて(ちゃんと仕事についたのは珍しい)「子どもの作業衣を洗濯したとき、残念さと、悲しさで涙がでた、子どもだけは学校を卒業させ、普通に就職させたかった」と言われたときに、引き留めて卒業させることができなくて申し訳なく思い、こちらも涙が出たのを覚えている。

結局、350人ほど入学して260人前後の卒業だったと思う。100人近くが3年間で辞めるのである。まだまだ、書けない状況は沢山あるがひかえない。

ここでは、保健体育教員は他の教員と一線を引いており、厳しい指導をしていた。他の教員より、粗暴な集団と思われるのが悲しかった。厳しい指導もするが、生徒の事を考えて遅くまで面談したり、家庭訪問をしているのは他の教員とも共通している。

もう、精神的に持たないかもと、思っているときに、大阪教育大学附属高等学校平野校舎から声がかかった。1人転出するのでどうか、と平野の教務部長、後の副校長から声がかかったらしい。大阪府を退職しなければならぬと聞いて、二の足を踏んだが、先輩や知人に相談し、受けることに決めた。ちょうど府に20年勤務した節目であった。このとき、阪神淡

路大震災を経験した。

## 6. 大阪教育大学附属高等学校平野校舎

国立の附属校の人事は基本的に所在県・府・都との交換である。大阪教育大学は全国でもめずらしく1大学で3つの附属高等学校（小・中も同じ）を持っている。普通は2校までである。校種は違うが、池田小学校の事件は忘れられない。痛ましい事件である。その後、各学校・各校種で全国的に門を閉めることになった。地域に開かれた学校から、閉じこもりの学校になってしまった。痛ましく、悲しい事件である。

平野は、全部で9クラスの小規模校であり、国の教育研究校である。学習指導要領には従うが、別の観点からの教育をしても許されているため、例えば今、言われている小中一貫にするとかは、すでに20年前から考えられていた。留学、留学生の受け入れは当然であったし、希望者ではあるが海外研修や、国内の体験学習等は盛んに行われていた。

平野の生徒は、勉強もでき、スポーツにも一生懸命である。豊中高を思い出したが、数段上を言っている感じであった。よく勉強ができ、全体的に優秀であった。だが、所詮は子どもである。男子は、結構やんちゃである。スキー実習の際にゲレシュブをして雪の中に突っ込んだ男子がいて、これは骨折ぐらいしたかな、と思っていると、平然と起き上がってきて、ほっとした覚えがある。教員の言うことはあまり聞かない。何をするか理解できれば自分で判断する、である。

体育の授業は、できないのが恥とっており、できるまで必死に挑戦する。やはり、休まない。特に3年生は休まない。受験勉強の合間の体育は彼らにとっては唯一の運動の時間であり、運動の必要性を認識していた。保健の授業で教えるまでもない。哲学的な質問があったりするので、保健の授業の教材研究は大変であった。

50歳を過ぎてから、これでは生徒にしっかりしたことを教えることはできない、と思い大阪教育大学に内地留学を申請したが、何年か、かかったと思うができた時はうれしかった。保健体育科教育学のやり直しである。大学の教員もやりづらかったと思う。年齢の高い学生である。大学の同期の者が教授でおり、「久しぶりだな」と挨拶を交わした。

20代の若者と一緒に授業を受けた。現職ということがあるので、なんかの時には前でよく喋らされたが、それはそれで頭の中が整理できてよかったし、わかりやすく話すことの練習にもなった。

大阪から数人、京都から1人と現職教員が多くて、話相手もいて1年間学生に戻って楽しく過ごさせてもらった。現職と言うこともあり、京都での研究会にも微妙な立場で参加したのも懐かしい思い出である。

1年で必要単位を取得し、2年目は高校に戻り、修論の作成となったが、意識調査をしたため、データの打ち込みに1か月を要し、大変であった。

平野に戻ってから、教育研究の変化はめざましいものがあった。平野は、5校園が集中しており、特別支援、幼稚園、小学校、中学校、高等学校があり、連携して教育研究を進めていた。時々ではあるが、特別支援校と交流をしていた。特別支援校は宿泊設備もあり、カナダの高校と交流をしていたときに、3月の休みの際にカナダの生徒を宿泊させてもらった事もあり、お世話になった。しかし一度、特別支援の保護者に「まだ、人ごとですね」といわ

れたことがあり、苦い思い出もある場所である。

## 7. 神戸親和女子大学

親和では平成23年（2011）からお世話になった。ここまで、府立、平野校舎まで4校を経験してきたが、この大学で自分のやるべき事は、教育実習の指導である。平野は附属であるため、毎年、教育大学の学生が実習にきていた。そのためのノウハウを生かすということであろうと思った。そして、教員を育てる教員という立場になる。

高校の教員での立ち位置は、教科教育と、生徒指導そして生徒の進路指導の教員であり、生徒といっしょに保護者を説得したこともあるが、今度は教員を育てる事になる。そう考えると、責任の重さに圧倒されそうになった。私としては、保健体育の教員をしてきたが、副教科と言われ、何か面白くなかった。英数国社理は主要教科といわれ、別意識をもたれている。生徒に、「私は英文科に進みたい。体育ではない、英文科や」と面と向かって言われたことを思い出した。生徒に保健体育の教員は、運動だけだろう、と思われている現実がある。学生に同じ思いをさせるのか、しかし、誰かはなってもらわないと日本が立ち行かなくなる、等思いがいろいろ巡り、整理がつかないまま大学教員で出発した。

親和の学生は、全体的に素直である。ジュニアスポーツ教育学科の学生は保健体育の教員に憧れて入学してくる者が多い。また、中高と丁寧な指導を受けてきておりスポーツ好きである。そして、子どもが好きという学生が多い。ジュニアの意味は大きく、小さい子どものスポーツ指導を目指すこと、通信で小学校の教員を目指す学生もいる。そのような学生達に自分と同じ思いをさせるのか、と思うと積極的になれない自分もいるのであるが、人間は自分で、自分の進むべき道を決めなければならない。

どこの国でもそうであるが、国を作るには、特に教育は必要である。そのためには教員が絶対必要である。戦中までのように師範学校出身でなければ教員にできない時代ではなく、広く教養を持った教員を大学独自に社会に送り出すことができる。よい時代にはなっているが、教員としての資質が問われる時代でもある。それ故に、学生にはしっかりとした専門教養と社会的な教養を身につけて欲しいと思って接してきたつもりである。

大学生であるので、ある程度、思いが伝わるのはうれしいことであった。親和の校訓に「誠実」「堅忍不拔」「忠恕温和」という言葉がある。この言葉は好きな言葉であり、ずっと入ってきた感じであった。というのは、柔道の創始者は嘉納治五郎・兵庫県御影の出身であるが、「教育のこと、これに勝るものなし」と言っており、誠実に生徒に接し思いやりの心を持って、時としては厳しく接し、「何くそ！」（あまり良い言葉ではない）の気持ちを持って進め、と言っている。相通じるものがあったからである。これを伝え切れていないところがあり、残念な気もしている。

## 8. おわりに

自分としては、柔道家が目標であった。東京に出るときも全日本選手権に出て頑張りたいと思っていたが、大学に入り自分の柔道が、たかだか国立大学（私学に強豪校が集中していた）の柔道部内ですら、通用せず、何が全日本か、と強烈な挫折感を体験し、荷物をまとめて家に帰ろうかと思ったことがある。

しかし、結局辞めずにいたのは、強くなるためには「堅忍不拔」ではないが黙々と稽古することの必要性和自分をここまでしたのは柔道であり、好きな事であったからである。自虐的といわれたこともあるが、踏みとどまれたのは、仲間も良かったかもしれないし、先輩方も良い人が多く、1年の合宿で3年生の先輩に「諦めずに稽古をしろ、少しづつ強くなっているのだから、あきらめたらいかん！」と話をされたこともあった。

先生方も良くて、必ず道場に顔を出して、言葉をかけてくれた。高校までならそういうこともあったと思うが、大学でも声かけをしてくれていた。私は、柔道部の中でも小さい方だったので心配だったのであろう。先生方とは、卒業してからの付き合いが長くなっているが、卒業してからも試合で関西方面に来られたときは必ず、大阪に寄って柔道界の話や世界の柔道界の話しながら食事をして、時折個人的に声をかけたりしてくれた。そして、中学2年の時に初段を取得して以来、現在八段まできている。もう、自分の力では昇段できないところまできている。

一つ、柔道を理解してもらうために試合の話を書くと、高段者大会という試合がある。近畿高段者大会での事を紹介すると、自分は体重78kgであるが相手は100kg超の人であった。組んで手（体？）に感じる重さが違っていた。子どもを相手にしているとき、重さを感じることはない。説明は難しいが、体重の重さではない。柔道競技者の重さとても表現するしかないが、相手も高段者であり、これは技が効かない、と感じたが、やはり仕掛けても動かなかった。これが柔道である。技が決まるときは、あまり力を必要をしなかった。心理では、無意識の意識とても表現するのかもしれない。これが柔道の技である。他の武道も多分そうであろう。

学校に話を戻すと、学校は社会の縮図と言われている。「いじめ」「差別」はなくなる。現役の校長で「私の学校ではいじめはありません」という人がいるが、信用できない。学校内の現実を見ていないと思ってしまう。

高校教員の時は、副教科（他の芸術、技術家庭の教員も同じ）の教員といわれ、教員、生徒から違った目で見られてきた。また、大学にきたら実務家教員と言われる。これは、研究者としての大学教員ではない、ということであろう。違和感を感じたのは私だけかもしれない。

このようなことは、なくなることはない。どうするか。自分で道を探すしかない。昔の教育者に大村はまという方がおられるが、「教えるということ」という著書の中で「口語の研究をしたらどうか」言われ（研究研究と言われていた）、「作文の研究じゃいけないんですか！」大きな声でどなったと書いてあった。これこそ自分の道である。

私も、自分の道を大切にしたいと思っている。もう出番はないが。高校の教員をしていたときに、感じたことに生徒は自分の道を持っている教員は、教科に関係なく認めるという事実がある。私は柔道何段で修行中といえば、「ふ〜ん」ではあるが認めてくれる。

同僚に数学の先生がいたが、聞いた話でしかないが、授業中に、生徒にそこが違うのではと指摘されたことで、1時間、授業をほったらかして、問題に黒板を使って挑戦したそうである。その間生徒は好き放題の事をしていたが、気にせずに彼は問題に取り組んでいたと、担任した生徒に聞いたことがある。冗談も全く通じない教員であったが、生徒には人気があった。生徒は教員の真剣に打ち込む姿に自分なりの尊敬の意識を持つのであろう。

大学ではどうするのか。私は負けず嫌いである。なにくそ！である。2年に1度は必ず論文を書く事にしていた。実務家でも書ける、である。

人間はもう良い、と思えば進歩はない。生きている限り挑戦する気持ちが必要なのではないだろうか。自分の道は持ち続けたい。

大学の皆様には感謝しかありません。



## 齋藤正俊教授教育・研究業績一覧

### 1. 学校現場での実務経験

- 大阪府立堺東高等学校 保健体育科教諭 (1974年4月～1982年3月)
- 大阪府立豊中高等学校 保健体育科教諭 (1982年4月～1989年3月)
- 大阪府立西成高等学校 保健体育科教諭 (1989年4月～1995年3月)
- 大阪教育大学採用 附属高等学校平野校舎に配属 (1995年4月～2008年3月)
- 大阪教育大学附属高等学校平野校舎 副校長 (2008年4月～2011年3月)
- 大阪府立豊中高等学校 保健体育科教諭生徒指導主事
- 大阪府高等学校生活指導研究会副委員長 (1988年4月～1989年3月)

### 2. 競技(柔道)に関する業績

#### 【選手・指導者】

- 1 大阪教員柔道団体戦代表選手・近畿予選 1974年8月 報徳学園高等学校
- 2 国体・教員柔道の部 大阪代表選手 1976年10月 青森県
- 3 全国教員柔道大会 大阪代表選手 1979年8月 栃木県
- 4 第36回国体柔道競技 大阪少年部コーチ 滋賀県
- 5 近畿高段者大会 五段の部 技術優秀賞 1984年3月 大阪府
- 6 全国教員柔道大会 大阪代表選手 鳥取県 ベスト16位
- 7 全国教員柔道大会 大阪府監督 1991年8月 山形県 ベスト16位

#### 【競技役員】

- 1 大阪府柔道連盟役員 1986年4月 庶務・幹事・審判員 (1991年3月まで)
- 2 大阪府柔道連盟役員 1991年4月 審議委員 (2006年3月まで)  
2009年4月 審議委員 (現在に至る)
- 3 関西武道学会 (22年6月名称変更・22年5月まで大阪武道学会)  
2003年4月指導論・理事 (現在に至る)

#### 【大会運営等】

- 1 第1回ミキハウス大阪国際女子柔道クラブカップトーナメント 記録係 1990年4月  
大阪府立体育会館
- 2 アジア大会柔道の部視察 1990年9月 北京市
- 3 第7回太平洋柔道選手権大会視察 1991年6月 ハワイ・ホノルル市
- 4 第7回アジア柔道選手権大会準備委員・運営委員 1991年9月 大阪府立体育会館
- 5 第2回ミキハウス大阪国際女子柔道クラブカップトーナメント 運営委員 1992年  
1月19日 大阪府立体育会館
- 6 第8回全日本女子柔道団体優勝大会視察 1992年6月 岡山市
- 7 第47回山形国体柔道の部視察 1992年10月 山形・山辺町
- 8 第10回福岡国際女子柔道選手権大会視察 1992年12月 福岡
- 9 第8回アジア柔道選手権大会視察 1993年11月 マカオ

- 10 第48回東四国国体柔道の部視察 1993年10月 愛媛県、徳島県
- 11 第11回福岡国際女子柔道選手権大会視察 1993年12月 福岡市
- 12 第3回ミキハウス大阪国際女子柔道クラブカップトーナメント運営委員 1994年1月 於：大阪府立体育会館
- 13 日米高校柔道エキスチェンジプログラム派遣教師 1994年3月  
カリフォルニア州パーリヤ・ハイスクールにて柔道指導およびデモンストレーション
- 14 第49回名古屋わかしゃち国体柔道の部視察 1994年10月 愛知県
- 15 アジア大会柔道競技全日本柔道連盟派遣競技役員 1994年10月 広島県・広島市
- 16 第4回ミキハウス大阪国際女子柔道クラブカップトーナメント運営委員 1995年1月 大阪府立体育会館
- 18 全国教員柔道大会視察 1995年8月 広島県・廿日市市
- 19 第50回福島国体柔道の部視察 1995年10月 福島県・会津若松市
- 20 '95世界柔道選手権視察 1995年11月 千葉県・幕張市
- 23 全国教員柔道大会 運営委員・進行放送係 1996年8月 大阪府・箕面市
- 24 正力杯国際柔道大会視察 1996年9月 東京都
- 25 第51回広島国体柔道の部視察 1996年10月 広島県・廿日市市
- 26 '97ワールドカップ女子柔道団体トーナメント運営委員 1997年1月 大阪府立体育会館
- 27 第52回なみはや国体柔道の部準備委員・運営委員 1997年10月 大阪府・箕面市
- 28 アジア柔道選手権視察 1997年11月 フィリピン・マニラ市
- 29 アジア大会柔道の部視察 1998年12月 タイ・バンコク市
- 30 五大都市大会柔道の部 競技役員 総務係 1999年7月 大阪府大阪中央体育館
- 31 2000年アジア柔道選手権大阪大会専門部会長 1999年12月
- 32 IJF（世界柔道連盟）第4回柔道セミナー受講派遣員 2000年3月 イタリア・ローマ市
- 33 2000年アジア柔道選手権大阪大会専門部会長・全体運営 2000年5月 大阪府・大阪中央体育館
- 34 第3回東アジア大阪大会柔道競技準備委員委員会 総務部 2000年10月
- 35 第3回東アジア大阪大会柔道競技役員 総務部 2001年5月 大阪府・大阪府立体育会館
- 36 第55回全国高等学校総合大会柔道の部 競技役員 2006年8月 大阪府・堺市
- 37 大阪講道館少年の部指導員 2008年4月 大阪講道館（現在に至る）

#### 【その他】

- 1 教科書作成 『高等学校保健体育指導のてびき』1980年 大阪府教育委員会編 柔道担当
- 2 附属高校平野校舎とバンクーバー・セントジョージ高校との交流 2008年1月  
附属高校平野生徒15名を他2名の教員とともに引率し、指導、国際交流をおこなう。
- 3 少年柔道の指導 2008年4月～大阪講道館にて主に小学生に隔週土曜に技術・礼法

指導

#### 4. 研究に関する業績

##### 【学術論文】

- 1 柔道に関する意識の因子分析的研究－中学生男女共修授業における意識変容－  
共著 平成23年3月 講道館柔道科学研究会紀要 第13輯
- 2 中学校武道教材「柔道」について－中学校保健体育教員の意識調査から  
共著 平成25年3月 講道館柔道科学研究会紀要 第14輯
- 3 教育実習時における学生の意識と指導教員の意識について－アンケート結果より  
単著 平成27年5月 神戸親和女子大学 ジュニアスポーツ教育学科紀要 第3号
- 4 学校体育の柔道種目における生徒の認識に関する研究  
共著 平成29年3月 神戸親和女子大学 国際教育研究センター紀要 第3号
- 5 少年柔道保護者に関する意識調査－カナダ・リッチモンド市S柔道クラブの場合－  
単著 平成30年2月 神戸親和女子大学 国際教育研究センター紀要 第4号
- 6 UK法から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴－性別・年齢別区分別初回検査時の  
データ分析－  
共著 講道館柔道科学研究会紀要

##### 【学会発表】

- 1 中学校武道教材「柔道」について－中学校保健体育教員の意識調査から－  
協同研究 平成23年9月 日本武道学会 東京農工大学
- 2 日本における正課体育「武道」必修化に伴う指導教師の意識分析－中学校「柔道」を  
担当する男女保健体育科教員について－  
協同研究 平成25年9月 国際武道学会 筑波大学 2013 INTERNATIONAL BUDO  
CONFERENCE BY THE JAPANESE ACADEMY OF BUDO
- 3 Survey on Consciousness of Parents of Children Learning Judo-In Case of 1 Judo Club  
in Canada－  
単独研究 平成29年9月 第2回国際武道会議 (2017INTERNATIONAL BUDO  
CONFERENCE) 日本武道学会 第50回記念大会 関西大学
- 4 UK判定4指標から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴3－男女選手の心理データ  
分析から－ 協同研究 平成30年9月 第51回武道学会 東京学芸大学
- 5 柔道におけるメンタルサポートに関する基礎研究3－強化選手40年間のUKデータか  
ら：曲線傾向3 分類別分析－ 協同研究 令和1年11月16日 スポーツ心理学会  
第46回大会 筑波大学ポスター発表・発表者